

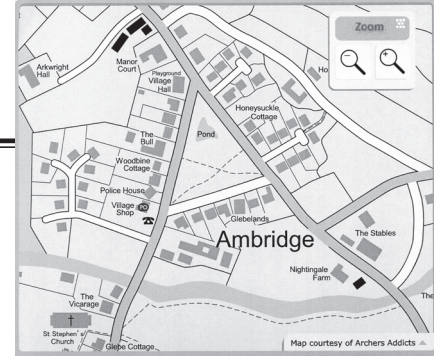
■英国のことあれこれ (1)

The Archers (アーチャー家の人々)

Ichikawa Yasuo

中央大学教授

市川 泰男



私が初めて英国を訪れたのは28歳の夏、ロンドン大学の夏期講習で約1ヶ月間英語を勉強した。何を勉強したかほとんど覚えていないが、講師が午前中の音声学の授業を Good Morning! と言って終わりにしたこと、また別の講師は授業中にやたらと Are you happy? と言っていたのだけは鮮明に記憶している。前者は「さようなら!」後者は「(この説明で)分かりましたか、いいですか?」という意味であることを知って新鮮な感じがした。ある週末に、エクセターの方へドライブ旅行に出かけたときに車中で初めてBBCの英語を聞いた。学生の頃はもっぱらFENを聞いていた私には、BBCの英語が何と美しく聞こえたことか。

それから6年後、レディング (Reading) 大学の CALS (Centre for applied linguistics) という所で、2ヶ月間英語の教授法などを勉強した。レディング大学の寮に着くやいなや、派遣された仲間の一人が、オスカー・ワイルドが同性愛で有罪判決を受けて収監された刑務所の一つであるレディングの刑務所へ案内してくれた。今思えば、いきなり案内された所としては奇妙な場所である。もっとも、ある研究会で北海道旅行をしたことがあるが、皆で網走の刑務所を外から眺めたことがある。恐らく入ることはないであろうという確信みたいなものが、そのような場所も見学させる気にさせるのかもしれない。ボズウェルの『ヘブリデーズ諸島旅日記』の中には、ジョンソン博士が船上の人は牢獄にいる人より惨めであると言ったという下りがあるが、身の安全、快適さなどを考慮すればそのように言えたのかもしれない。ジョンソンの時代に現在の豪華客船があったら、異なる見解を表明していたであろう。

CALSでの研修期間の前半は大学の寮で過ごし、後半は大学近くでホームステイをした。私はフローラ夫人の家に滞在した。フローラさんは ex-

BBC staffであることを自慢に思っていて、あるとき、私をレディングにあるBBCのMonitoring Centreに案内してくれた。ここでは007を生み出すお国柄、世界各国の放送を傍受して何やらファイルを作成していて、フローラさんはチェコ出身なのでチェコ語の放送を傍受していたとのことだった。

このフローラさんが毎日楽しみに聞いていたのがThe Archersというラジオドラマだった。私は大きな音量で流れてくるその番組を断片的に聴いていただけだが、ドラマの始めに流れてくる調子のよいメロディーが特に印象的であった。在外研究でケンブリッジに滞在していたとき、日曜日にそのOMNIBUSが放送されるのを知って、ほとんど欠かさずテープに録音しておいた。今でも夜中に目が覚めてしまうときなどは繰り返しばんやりと聞いているが、特に40周年を記念したBBC RADIO COLLECTIONのTHE ARCHERS: The Weddingというエピソードは聞くたびにほんのりとした郷愁みたいなものを覚える。

この番組はAmbridgeという架空の村を舞台に田舎の人々の日常生活を描いた物語で、何と1951年に放送が始まり今日でもまだ続いている。このような長寿番組の存在は英国の文化、英国人の特質を考えるとときに何かヒントを与えてくれそうだ。BBCのホームページからこの番組にアクセスするとAmbridgeの地図やアーチャー家の系図まで載っているのには驚かされる。それどころかThe Archersを日本にいながら楽しむこともできるのだ。正にInternetに感謝、だ。

緩やかに起伏する英国の田園風景を思い浮かべながらこのドラマを聞いていると、自然に英語が身に付くような気がする。英語教育もこの技術の進歩を利用しない手はない、と思うのは私だけではあるまい。